大館の歴史散歩

戊辰戦跡を歩く⑪

大館城回復と戊辰戦士の墓

九月一日、綴子の大館佐賀連合軍本陣では、軍議で川口の南部軍攻撃を翌二日と決定した。綴子出陣は暁丑刻（午前二時）。本道、中須田間道、板沢間道の三手に分かれての出撃である。『大館戊辰戦史』には、この時の張りつめた様子を「是日天気晴れ秋風凜乎として肌膚に泌み、軍容自ら粛然たるを覚ゆ……」と記している。

一方、南部軍総大将楢山佐渡は、小繁山、坊沢、綴子と連戦敗退の雪辱を果たそうと、未明に川口から岩瀬へ軍を進め指揮を執っていた。この日の両軍の兵力はともに千四百。こうして岩瀬会戦の火蓋は切って落とされたのである。

本道勢は米代川岸において苦戦しながらも、午前中ついに南部軍を退け、岩瀬山を占拠した。中須田間道勢はほとんど交戦なく、川口で本道勢と合流。また、板沢間道勢は板沢での南部軍の昼食時を奇襲し、これを成功させた。川口に結集した連合軍諸隊は、餅田の南部軍を片山まで押し返し、さらに二頭山（二ツ山）の南部軍を破り、その勢いで土飛山に向かった。一方、餅田橋下から舟場付近まで進んだ一隊は、勝坂で南部軍の頑強な抵抗にあい、苦戦をしいられた。

この日の戦闘で、大館隊は小隊長二人を含む十二人が戦死、重傷十三人。佐賀藩士卒四人が戦死、重傷七人を出したが、決着がつかないまま日没を迎え、休戦となった。

『出羽戦記』は「此合戦は双方一時に押寄せ相掛りたる事なれは、戦勢一層烈しく両軍入り乱れて、野も山も戦場ならざる処なく云々」と戦闘の激しさを伝えている。佐竹大和は二頭山に陣列を立てて散兵を集合させ、楢山佐渡は大館町はずれ神明堂を本陣として、わずか十余町を隔てて対峙した。

翌三日は風雨が強く、両軍の陣容の立て直しとにらみ合いが続いた。四日になり戦線は舟場、片山野下、沼館口、板子石口、松木山上までと拡大、全面的な攻防戦が展開されたが、五日になっても強靱な南部軍を撃破することはできなかった。

連合軍はこの夜、餅田本陣で軍議を開き、総攻撃を六日早朝と決定した。ところが進撃直前、大館町民から思いもかけない通報があった。南部軍は夜のうちに雪沢口へ退却したというのである。このことについては、南部方の資料『秋田藩へ討入之日記』九月五日の条に「敵兵日々多人数ニ相成、味方兵士追々労れ、外ニ応援之兵も無之、（中略）玉薬最早明日之合戦ニハ一挺江十七発積リ外ニ無之」とあり、自軍兵士が疲労していたことと、弾薬が著しく不足であったことなどを伝えている。

南部軍退却の報を受けた連合軍は六日、佐竹大和の全隊を最先陣に大館入城を果たした。落城以来十四日目のことであった。しかし、城内外の人家はことごとく焼け落ち、あちこちに藁小屋を建てて雨露をしのいでいる者がいる。大館を回復した喜びとは裏腹に、多くの兵士は戦の悲惨さを感じないではいられなかったであろう。

さて、皆さんは万吉川原地内（現清水五丁目）に戊辰戦士の墓があるのをご存じであろうか。墓の主は岸慶治。九月四日の戦闘で到れた秋田藩士である。諱は吉季、享年四十歳であった。後年、長男吉祐が記した『岸慶治伝』には、「九月四日片山激戦の際、手提六匁銃、挺衆前進発射、遂為賊兵所襲其背後、接戦被数創陣没」とある。しかし、なぜ彼の墓が他の戦没者のように社寺の墓地にではなく、こうして万吉川原にあるのかは不明である。

かつて戦場であったこの地は現在、河川が改修され、公園の整備が進み、当時の情景を思い浮かべることはむずかしいが、墓のある一角だけは、時の流れが止まっているかのように思えるのである。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

『小さい宿み～つけた』

藤嶽彰英 著　保育社

時には雑踏をはなれて、落ちついた雰囲気のある宿でこころを和らげるのもいいものである。

宿の主人のこまやかな息づかいがじかに伝わってくるような、そんな小～さい宿が満載！

一般書　◇明治の兄妹（早乙女貢）◇海辺の扉〔上・下〕（宮本輝）◇ジャズ・クレオパトラ（P・ローズ）◇上級グルメへの招待（佐原秋生）◇森の歳時記（河合雅雄）◇イルカの集団自殺（森満保）◇青春デンデケデケデケ（芦原すなお）◇夢の宴（阿刀田高）◇第三の経営（田原総一朗）◇NHK大河ドラマ・ストーリー『太平記』（吉川英治原作）ほか

児童書　◇コウモリのふしぎな世界（前田喜四雄）◇お母さん、笑顔をありがとう！（小川陽子）◇咸臨丸の男たち（砂田弘）ほか

2月のテーマ関連図書コーナー・『方　言』

親子読み聞かせ会

毎月第１金曜日　午後２時30分から

中央図書館の休館日

２月17日、28日、３月17日